

## 第二章 北清事變後ノ露國ノ極東政策

### 北清事變後ノ滿洲

筆者カ外務省ニ入ツタ明治三十三年ハ北清事變ノ起ツタ年テ、筆者ハ此事件ノ一部ヲ取扱ツタカ、筆者ヲシテ外交ニ興味ヲ持タセ職ヲ外務ニ奉スルニ至ラセタ動機タル露國ノ極東政策ハ、此事變ヲ機會トシテ急激ノ活氣ヲ呈シテ來タ。即チ露國ハ之レニ藉口シテ多數ノ軍隊ヲ滿洲ニ送リ、威力ヲ用ヒテ清國ト協約ヲ結ヒ、滿洲併呑ノ鋒銳ヲ露骨ニ現ハシテ來タ。我當局カ之レヲ傍観スルコトノ出來ヌノハ勿論テ、百方手段ヲ盡シタカ、當時英國ハ南阿事件ノ爲ニ行動ノ自由ヲ得ス、自ラ發議シテ支那保全ノ協約ヲ英國ト結ンタ獨逸ハ滿洲ヲ此協約ノ適用範圍外タト聲明シ、ソシテ露國自身ハ其外務大臣ノ口カラ我珍田公使ニ對シ、滿洲問題ハ露清兩國ニ專關スル事件タカラ他國ノ質問ニ彼此應答スル義務ハ無イト述ヘ、又現下露國ノ滿洲占領ハ其國境ヲ清兵カ侵シタノニ對スル防禦ノ結果タカラ、假令永久ニ之レヲ占領シテモ無論露國ノ權利内テハアルカ、鐵道保護其他ニ付テ清國トノ間ニ協議カ調ヘハ、露國ハ敢テ戰勝ノ權利ヲ實行セントスルモノテハナイト豪語シテ居ル様ナ次第テ、佛國ハ其同盟國テアリ、米國ハ滿洲ノ占領カ單ニ一時的性質ノモノタト云フ露國ノ保障ニ満足シテ何ノ行動モ取ラス、事件ニ最モ直接ノ利害ヲ有スル清國テハ、政府ノ第一人者タル李鴻章カ露國ニ買收サレテ居ル様子ナノテ、曩ニ東清鐵道ノ敷設許可ヲ露國ニ與ヘタ時ノ様ニ如何ナル抜ケ駆スクシテ所謂旅順協約ハ破毀セラレタ。

### 明治三十四年ノ露國對清要求

是ヨリ先明治三十二年ニ在清露國公使ハ總理衙門ト協約ヲ結ヒ、遼東租借地ノ北ニ位スル中立地帶ノ境界ハ蓋州河口ニ始マリ岫巖ヲ通貫シテ東南ニ向ヒ、大洋河ノ左岸ニ沿フテ其河口ニ達ス、海洋島ハ露國ニ讓與セラレ、露國ハ租借地ノ北方境界線ト并行スル緯度ノ南ニ在ル諸島及水面ヲ全部使用スルノ權利ヲ有ス、廟嶮群島ハ租借地ニ包含セラレスト雖、清國ハ該群島ノ使用ヲ何レノ國ニモ讓與セス、同所ニ何等ノ條約港ヲモ開カヌコトヲ承諾ナセテ居リ、今（明治三十四年二月十九日）又夫ノ旅順協約ニ代ハルモノトシテ左記要領ノ約定案ヲ提出シタ。

舉ヶテ清國ニ還附シ、清國ノ行政ヲシテ悉ク其舊態ニ復セシムヘシ。

二、清國ハ東清鐵道約款第六條ニ依リ軍隊ヲ以テ該鐵道線路ヲ防護スルノ權利ヲ該鐵道會社ニ許與セリト

雖、國內尙其秩序ヲ恢復セス且同軍隊ノ員數亦不充分ナルニ依リ、軍隊ノ一團ヲ滿洲内ニ駐屯セシムル必要アリ、但此軍隊ハ平和及秩序ノ恢復セラレ且本約定最終ノ四款實行セラレ次第撤退スヘシ。

三、非常ノ事變アル場合ニハ、滿洲内ニ駐屯ノ露國軍隊ハ、擾亂鎮定ノ爲出來得ヘキ丈ノ援助ヲ清國ニ與フヘシ。

四、露國ニ對スル輓近ノ攻擊ハ主トシテ官兵ノ所爲ニ出テタルニ依リ該鐵道ノ峻功ヲ告ケ、且其運輸ヲ開始スル迄ハ、清國ハ何等ノ軍隊ヲモ組織セサルヘキ事ヲ約ス。

其後ニ至リ清國軍隊ヲ組織スヘキトキハ、其兵員ハ露國ト協議ノ上之レヲ定ムヘシ。

兵器彈薬ハ滿洲ニ輸入スルヲ禁ス。

五、清國ハ地方ヲ保守スル將軍等ノ高官ニシテ、外國關係ノ事件ニ就キ不當ノ行爲ヲ爲シ、之レニ對シテ露國ノ提議スルモノヲ直チニ免職スヘシ。

清國ハ警察事務ノ目的ヲ以テ、滿洲ニ於テ歩兵及騎兵ヲ組織スル事ヲ得、但其員數ハ露國ト協議ノ上之レヲ定ムヘシ。

大砲ハ前記兵士ニ與フヘキ武器ヨリ除外セラルヘシ、而シテ該兵士ノ任務執行ニ關シ、他ノ外國人ヲ使用スヘカラス。

六、清國ハ曩ニ承諾セル如ク、清國北境ノ海軍並ニ陸軍ノ教練ニ他ノ外國人ヲ使用スヘカラス。

七、平和及秩序ヲ保持スル爲遼東租借地約定第五條ニ規定シタル中立地帶ノ附近ニ駐在スル地方官ハ事宜ニ應スヘキ特別規程ヲ設ケ、且該特別約定第四條ニ依リ清國ニ保留シタル金州ノ行政自治權ヲ拋棄スヘシ。

八、清國ハ露清國境ノ諸州、即チ滿洲、蒙古並ニ新疆ノ「カシガル」、伊犁、「ヤルカンド」、「コータン」

等ニ於テ、鑛山、鐵道其他ノ事項ニ關スル何等ノ便益ヲ、露國ノ承諾ナクシテ他ノ外國若ハ其人民ニ許與スヘカラス、又前記諸州ニ於テハ清國モ露國ノ承諾ナクシテ鐵道ヲ敷設スヘカラス。

牛莊市外ニ於テハ他ノ外國人ニ土地ノ租借ヲ許與スヘカラス。

九、清國ハ露國ノ軍費並ニ他列國ノ諸要求ヲ支拂フヘキ責務ヲ有スルニ依リ、露國ニ對スル賠償ノ金額、支拂ノ條件及之ニ對スル擔保ハ、他列國ト共同シテ協定スヘシ。

一〇、鐵道及會社備員ノ財產ノ破壞、並ニ工事ノ遷延ヨリ生シタル損害ニ對スル賠償ハ、清國ト鐵道會社トノ間ニ於テ協定スヘシ。

一一、諸種ノ損害ニ對スル賠償ニシテ清國ト鐵道會社トノ間ニ協定セラレタルトキハ、其賠償金額ノ全部若ハ一部ハ、金錢上ノ賠償以外ナル便益即チ鐵道ニ關スル現行約款ノ改正若ハ新便益ノ許與ヲ以テ之

レニ充ツヘシ。

一二、清國ハ曩ニ承諾シタル如ク、滿洲鐵道ノ幹線若ハ支線ヨリ北京ニ向ヒ長城ニ至ルノ鐵道敷設權ヲ露

國ニ許與スヘシ。

李鴻章ハ露國ノ走狗

支那ハ此露國提案ヲ我國ノミナラス、英、獨、米等ノ諸國ニ内報シテ牽制政策ヲ試ミタカ、列國ノ打合容易ニ抄ラナル一方、露國ノ壓迫愈々加ハルト同時ニ、李鴻章ノ親露態度益々露骨トナリ、今ヤ李獨リ露國ニ代ツテ提案ノ受諾ヲ清國ニ迫リツツ在ルカ如キ奇觀ヲ呈スルニ至ツタ。加藤外相ハ在東京清國公使ニ對シ受諾ヲ急クノ全然無益ナル理由ヲ縷々説明シ、若シ此警告ニ拘ラス露國ノ要求ヲ容ル時ハ、他國モ亦露國ノ轍ニ倣ツテ類似ノ要求ヲ提出シ、讓與ノ地域ハ必スヤ全清ニ及フヘシト切言シタ。右ハ事態當然ノ推理タルコト勿論テハアルカ、其數日前露國提案ニ關シテ在英林公使カ「ランスダウン」侯ト會談中、同侯ハ若シ露國カ其主張ヲ貫徹スレハ、英國モ亦露國ノ得タ満足ニ比例スル何物カヲ清國ニ要求セネハナラヌト語ツタ一節ニ徵シ、加藤外相ノ警告カ徒ラニ架空ノ豫想ノミニ基クモノテ無イコトヲ知ルコトカ出來ル。

露國要求ノ一部緩和ト期限附承諾強要

超エテ三月中旬露國ハ其提案中一、二、三、九、一一ハ原案ヲ維持スルカ、六ヲ削除シ、四、五、七、八、一〇、一二ニ對シテハ左記ノ讓歩ヲ申出テ、若シ清國カ十日以内ニ調印シナケレハ之ヲ撤回スヘシト強迫シタ。

四、輓近露國人ノ蒙リタル攻擊ハ主トシテ清國官兵ニ依リ行ハレタルヲ考料シ、且滿洲鐵道ノ保護並ニ鐵道工事ノ實行ヲ確保シ、及露國々境ニ於ケル騷擾ヲ防止スル爲、清國ハ露國ト協議ノ上、滿洲駐屯兵ノ員數並ニ之ヲ駐屯セシムヘキ場所ヲ定ムヘシ。兵器彈藥ノ輸入ハ、今後列國ト締結セラルヘキ一般協定ニ從ツテ禁止スヘシ。其レ迄ノ間清國ハ自發的ニ一時ノ手段トシテ此種物件ノ輸入ヲ禁止スヘシ。

五、滿洲ノ靜寧ヲ保タンカ爲、總督又ハ地方高官ニシテ、外國トノ關係ニ影響スル事件ニ於テ、不當ノ行為ヲ爲シタル者アルトキハ、露國ノ供述ニ接スルヤ直チニ之ヲ他ニ轉任セシムヘシ。

清國ハ警察上ノ目的ヲ以テ、歩兵及騎兵ヲ滿洲ニ置クコトヲ得、而シテ同地カ全然安定ニ至ル迄ハ、其員數ハ露國ト協議ノ上之ヲ定ムヘシ。前記兩種ノ兵員ハ其兵器中ニ大砲ヲ加ヘ用フルヲ得ス、且其職務ノ實行ニ關シテハ清國人ノミヲ專用スヘシ。

七、平和及秩序ヲ保持スル爲、租借地約定第五條ニ規定シタル中立地帶附近ニ駐在スル地方官ハ、事情ニ適合スル特別法規ヲ設定スヘシ。

八、清國ハ前以テ露國ト協議ヲ遂ケヌシテ、滿洲全土ニ於ケル鐵道及礦山ニ關スル讓與及何等商業上ノ利益ヲ、何レニ係ラス他國又ハ其臣民ニ許與スヘカラス。

一〇、鐵路又ハ鐵道會社員所有物ノ破壞及工事遲延ノ結果タル損害ニ對スル賠償ハ、北京ニ於ケル外國代表者間ノ議決ヲ經、且列國ノ承諾シタル計算法ニ遵據シテ、清國及鐵道會社間ニ定メラルヘシ。

一二、清國カ一八九九年九月二十八日一私立會社ヨリ借入レタル資金ヲ以テ、山海關ヨリ起リ牛莊及新民廳ニ至ル迄、滿洲ニ於テ直線鐵道ヲ築造シタルノ行爲ハ、露清間ノ前約ニ背反シタルモノナリ、右背約ノ報酬トシテ且ハ滿洲ニ於テ速カニ平和ヲ恢復スルノ目的ヲ以テ、清國ハ東清鐵道會社ニ許スニ、同會社鐵道ノ幹線又ハ枝線ヨリ起ツテ、滿洲及直隸省ノ境界ニ當レル長城ニ至ル迄ノ一鐵道線ヲ築造スルノ權ヲ以テスヘシ。

## 日本ノ行動及列國ノ態度

是ヨリ先キ獨國政府ハ滿洲問題ヲ在北京列國代表者ノ會議ニ提出シテ議定スルノカ得策タトノ意見ヲ開示シタコトカアルノテ、加藤外務大臣ハ此意見ニ同意スルト同時ニ、差シ當リ清國ヲシテ露國要求ノ期間内ニ協約ニ調印セシメス、露國ヲシテ其云フカ如ク該案ヲ撤回セシムル様三國カラ清國ニ共同勸告センコトヲ英、獨兩國政府ニ申入レ、又米國政府ニモ其參加ヲ勸誘シタ。英國ハ直チニ全諾ヲ與ヘタカ、獨國ハ豫期ニ反シ過般既ニ清國政府ニ對シ目下北京ヲ談判ノ進行シテ居ル際、何レカノ一國ト別個ノ協約ヲ結フカ如キコトカアツテハ清國ノ不爲テ又失當テアルコトヲ通告シ、滿洲問題ヲ北京會議ニ附議スヘキ様勸告シタカラ、今改メテ同様ノ事ヲ繰返スニモ及フマシト答ヘタ。井上公使ハ露國カ回答期限附テ修正案ヲ提出シタノハ最近ノコトタカラ、事態ハ右勸告後ニ大ナル轉化ヲ爲シタノタト注意シタカ、獨國政府ハ露國ノ意圖カ平和的テ、事局ヲ極度迄押進メヨウツスル考ノ無イコトハ露國政府ノ保障スル所タカラ、此際獨逸カ日英ト共同シ

テ清國ニ助言ヲ反覆スルノハ利益テモナク又望マシカラヌ結果ヲ生スル惧レカアルト述ヘ、我期待ヲ裏切ルコト甚タシク、其不信ノ態度ハ恰モ獨逸既往ノ史實ヲ繰返スニ似タ觀カアツタ。米國亦教テ共同措置ヲ採ルノ決心ナク、期日ノ満了目焦ノ間ニ逼リ、日英ノ勸告文ケテハ清國ノ決斷ノ臍ヲ堅メサセルコトカ出來ヌ處カ在ルノテ、加藤外相ハ在露珍田公使ヲシテ、露國提出ノ協定案ハ滿洲ニ對スル清國ノ主權ヲ毀傷スルト同時ニ、清國ト關係ヲ有スル他國ノ利益ニ大ナル影響ヲ及ホシ、極東現在ノ權力平衡ヲ攪亂スル底ノモノ故、該協定ヲ他列國ノ利益ニ適應鹽梅セシムル爲北京ノ列國代表者會議ニ提出スル様露國政府ニ勸告セシメ、直チニ此事ヲ李鴻章ニモ知照シタ。珍田公使カ右ノ訓令ヲ執行スル爲露國外務大臣ト會見シタノハ明治三十四年三月二十五日タカ、「ラムスドルフ」伯ハ同公使ニ對シ、兩獨立國ノ間ニ談判中ノ問題ニ關スル此種ノ勸告ハ公然之レヲ接受スルコトカ出來ヌ、協定案ノ條項ニ關シ討議スルコトハ國家ノ威嚴上許サナル所テ在ルカ、他列強ノ爲ニ阻碍セラレサル限り露國ハ滿洲ヨリ撤退スルノ決心今尙渝ラス、協定ハ一時的性質ノモノテ、清國ノ主權ヲ侵蝕シ、又ハ他列國ノ權益ヲ害スル條項ハ毫モ存在セヌ、協定カ締結サレタ上ハ直チニ日本ニ對シテ相當ノ通知ヲ爲スヘク、此時ニ至ラハ日本政府ハ露國カ全然其保障ニ遵由シタ事ニ満足スルタロウ。萬一夫レテモ未タ日本カ説明ヲ要スルト認メル時ハ、兩政府ノ間テ何等カ友好的ノ約諾ヲ爲シ得ラルヘキヲ信スト述フルト同時ニ、滿洲問題ハ全然露國ニ專屬スル案件タカラ、之レヲ北京會議ニ附セントノ提言ハ、露國カ從來依遵シ來ツタ一般原則ト相容レヌモノタト聲明シテ、我勸告ニ聽クコトヲ拒絶シタ。之レニ對シ帝國ハ事局ノ推移スル迄露國ニ此上ノ意見發表ヲ保留スルカ、「ラムスドルフ」伯ノ意見ニハ遺憾ナカ

ラ同意スル事カ出來ヌ旨ヲ四月五日ニ回答シタ。

在露清國公使ノ發病ト承諾期限ノ自然經過

此交渉ノ最中露國外相ハ在露清國公使楊儒ヲ招イテ、三月二十七日午前一時迄ニ調印シナケレハ、之レヲ以テ清國ノ絕對的拒絶ト見做スヘシト威嚇シタカ、楊公使ハ外務省カラノ歸途突然中風症ニ罹ツタ爲、露國要求ノ期限内ニ調印スルコトハ事實不可能ト成ツタ。

加藤外相ノ强硬政策

加藤外相ハ珍田公使ニ對スル「ラムスドルフ」伯ノ應答振ヲ頗ル失當ト認メ、四月四日在東京露國公使ニ對シ大要左ノ如キ詰問ヲシテ居ル。

草案ノ通報ハ之ヲ受クルモ受ケサルモ政府ハ其一語一句ヲ悉ク知ツテ居ル、若シ「ラムスドルフ」伯カ望ムナラ各國ノ權利ト清國ノ主權トヲ侵蝕スル個條ヲ一々指摘スルノハ容易タカ、如何セン同伯ハ日本政府ノ陳辯ニ對シ、公然此種ノ通牒ヲ受クルコトハ出來ヌト拒絕ナレタト云フコトタ、一旦我通牒ヲ受領シタ上テ、其中ノ意見ニ對シ同意ヲ表スルト否トハ固ヨリ露國政府當然ノ權内ニ屬スルコトタカラ、敢テ他國カラ其同意ヲ迫ルコトハ出來ヌカ、苟モ友好ヲ締セル邦國ヨリ通牒ヲ提出シタノニ之レヲ拒ンテ受ケヌト云フノハ抑モ何事テ在ルカ。試ミニ位置ヲ換ヘテ貴公使ノ提出セラレントスル文書ヲ本大臣カ拒絕シテ

受ケサルトキハ、閣下ハ果シテ何ト云ハルヘキヤ。「ラムスドルフ」伯ノ回答中ニ滿洲ノ事ハ露國ノミニ關係ストノ語カアルカ、是レハ斷然承認スルコトカ出來ヌ。日本ハ滿洲ニ於テハ露國其他ノ諸國ト同様ノ權利ヲ有ス。即チ日本ハ最惠國均等ノ取扱ヲ受クルノ權利ヲ持ツテ居ル。加フルニ日本ハ極東テ列國均勢ノ亂サレルノヲ好マヌ。往年我國カ清國ト條約ヲ締結シ、其正當ノ權利トシテ遼東半島ヲ領有シタ時、露國ハ果シテ何ト言ヒシ乎。遼東ノ占領ハ東洋ノ平和ヲ害シ延テ韓國ノ獨立ヲ危フスト、是レカ當時露國ノ抗議シタ口實テ在ツタ。然ルニ今ヤ露國ハ遼東ヨリモ更ニ廣大ナ滿洲ニ於テ充分ナル占領權ヲ行ハントシテ居ル、往年貴國カ我ニ對シテ述ヘタ事實ハ今茲ニ發生セヌカ。要スルニ露國ノ行動ハ日本ノ權利ヲ侵害スルモノテアル、云々。

露國ノ要求徹回

我國ノ態度カ右ノ如ク强硬テ、其反響ハ勿論清國ニモ及ンタカラ、露國政府ハ協約談判カ意ノ如ク進捗シ能ハヌコトヲ悟リ、米獨等ニ對シ、露國政府ハ満洲ヨリ撤退スルヲ終局ノ目的トスルノ約定ヲ結フ爲ニ清國ト協議ヲ重ネテ居タ。若シ此約定カ直ニ締結セラレタナラ清國ノ利益ヲ在ツタ思フカ、露國政府ノ意思ニ付テ誤解ヲ惹起シ、一二外國カ不賛成ノ態度ヲ示スカラ、強イテ急ニ之レヲ締結スル意図ハナイト告ケ、我政府ニ對シテハ四月八日在本邦露國公使カラ左記要領ノ覺書ヲ加藤外務大臣ニ提出シタ。

露清兩國間ニ別個協商ヲ締結セントシタルハ、曩ニ露國ノ聲明シタルカ如ク、満洲ヲ清國ニ還附スルノ

意思ヲ漸次ニ實行スルノ途ニ向フノ目的ニ出テタルモノナリ。而シテ此目的ヲ達セんカ爲ニハ、清國ト合意ノ上満洲撤退ノ條件ヲ既ニ今日ヨリ定メ置クヲ得ヘキヤ否ヤノ問題ヲ、或時期ニ先チ確定スルコト必要ナリシハ明瞭ノ事トス。然ルニ露國政府ノ得タル諸種ノ報道ニ徵スルニ、現下ノ状勢ニ於テ右ノ如キ協商ヲ締結スルハ、清國ノ利害ニ關スル露國ノ友好的意思ヲ表彰スル手段トナラスシテ、却テ各種ノ困難ヲ隣邦ニ蒙ラシムルナキヲ保セサルカ故ニ、露國ハ啻ニ清國ニ對シ右協商ノ締結ヲ主張セサルノミナラス、尙進ンテ該問題ニ關スル今後一切ノ協商ヲ斷念スルモノナリ。露國政府ハ其數次聲明シタル當初ノ政綱ヲ終始確守シツツ徐ロニ事局今後ノ形勢ヲ視ントス。

斯クノ如ク露國政府ハ清國ニ對シテ満洲條約ノ締結ヲ強要セサルノミナラス、同問題ニ關シテハ今後清國ト一切ノ談判ヲ爲ナナル事トナリ、假令露國ノ軍事的占領カ今後尙繼續スルシテモ、満洲條約ノ撤回ハ同地ニ於ケル事態ヲ本件ノ起ラサリシ以前ニ復サシタモノテ、此點ニ關スル我政府ノ目的ハ達セラレタ譯テアル。此成功ハ加藤外相ノ籌畫宜シキヲ得タ爲ナルコト勿論テハアルカ、駐清小村公使カ常ニ必要ナ情報ヲ迅速ニ入手提供シ、其折衝亦能ク機宜ニ適シタコトカ、與ツテ大ニ力アリシハ今更メテ茲ニ贅言スル迄モナイ。

#### 其ノ後ノ露清交渉ト満洲還附條約調印

加藤外相ハ本件一段落後間モナク其職ヲ退キ、曾根荒助氏外務大臣ヲ兼攝シ、明治三十四年九月下旬小村

氏北京ヨリ歸還シテ、外相ニ親任セラレタカ、清國政府ハ一日モ早ク満洲ヨリ露軍ヲ撤退サセタイノテ、満洲談判ノ再開ヲ露國ニ交渉シタ、然シ當時ノ露國トシテ何ノ對償モナイ條約ヲ結フ氣遣ハナイ、先ツ露清銀行ヲシテ李鴻章ト満洲ニ於ケル商工業上ノ讓與ニ關スル協定ヲ結ハセタ後、始メテ満洲談判ノ再開ニ同意シタ。此ノ協定ノ根幹ハ東三省ニ於ケル鑛山、鐵道ノ企業權ヲ露國ノ手中ニ收ムルヲ目的トシタモノテ、是等ノ企業カ清國政府又ハ其國民ノ資本ニ依ツテ計畫サレル場合ニハ露清銀行ハ其會計ヲ經理シ、若シ右ノ計畫者無キ時ハ該企業ニ對シ露清銀行カ優先權ヲ有スト云フノカ其大綱テアル、此協定ニ對シテ我國ハ勿論米國カ頗ル强硬ニ反對シ、又満洲條約ニ就テハ日英側ヨリ修正意見ヲ出シ、英國公使ハ清國政府ノ決心ヲ堅メサス爲慶親王ニ對シ、日英同盟協約ハ無意味ノ恫喝テハ無イカラ、其邊ニ關シテハ萬々安心サレ度イト述ヘタトカ傳ヘラレテ居ル、斯クノ如キ經緯ヲ經テ出來上ツタモノカ、明治三十五年四月八日ノ満洲還附條約テ、夫ノ露清銀行協定ハ遂ニ不成立ニ終ツタ。